

## 第二十回 純黄賞選考資料抜粋

### 内藤丈子推薦

○越前の風土をこよなく愛して歌に刻印してゆく。老母への眼差しも温かく胸を打つ。もう一步、既成の言葉に寄りかからない独自の工夫を望みたい。

○北陸の福井県の人。その風土に愛着を持ち、自然、歴史、現代の諸相を多面的に詠む。母と二人暮らして、地域活動に参加するなど、生活感が豊かである。○故郷の風土を魅力的に詠いあげた歌は郷土への深い愛を感じさせる。又、老いゆく母を詠った歌はやさしく、あたたかくそしてかなしく心に響いた。

○ふるさと若狭への愛着に裏付けられた日常詠が魅力的である。また、調べの美しい歌が多く、それが豊かな情感を醸し出している。

○自然を抒情的に捉えつつ、事

実にしつかり着地する。はっとする表現を的確に斡旋する。固有名詞の魅力を取り込み詩情を生み出している。

○四季折々のふるさとを詠む歌は郷土愛に溢れ、老いてゆく母に向ける眼差しは温かい。

○生まれ育ち、今も暮らす若狭を愛し、その風土や歴史を丁寧な詠む。老いてゆく母との暮らしを詠んだ歌も味わい深い。

### 工藤亜希子推薦

○独特の詩の世界がある。理ではつながらない事柄が感性により無理なく結ばれる。きらめくような詩のこぼれを生み出す技量に優れている。

○新しく得た人との繋がりが世界を展げて、詩的感受がより深く自由になった。表現方法も幅広く多彩さを増し、明らかに歌詠みとしての成長が見られる。

第二十回純黄賞の選考のものとなった推薦文と作品の一部を、ここに掲載する。推薦文は○印が一人分、推薦作品抄は、推薦者の挙げた作品の中から編集部が適宜抄出したが、推薦の多い作品を前のほうに掲載してある。

## 推薦作品抄

### 内藤 丈子（第二十四回純黄賞）

白山の空よりアサギマダラ来る藤袴咲く越前の里  
夏の陽にゑんどうの莢の透きとほり母とかぞふるみどりご七つ  
蕎麦の花摘む母の背をさやさやとしづかに撫でる新涼の風  
河豚漁の若狭の海に音もなくブルサーマルの輸送船来る  
サバ缶が宇宙を飛びて若狭なる鯖街道は空へと伸びる  
我が歌を書き初めに書く母のため短冊買ひに雪の中ゆく  
若狭なる五つの湖をめぐりきて水鳥のごと足湯に入る  
しんしんと雪降りやまぬ越前に太郎と次郎の屋根の連なる  
さくさくとたけのこの皮をむく朝は初夏のひかりの水脈のあらはる  
さしも草燃ゆる伊吹の山のぼり蓬アイスで涼をとったり  
水しぶき川面に上げて投げ網は九頭竜川の落鮎ねらふ  
若狭高の生徒つくりたるサバ缶はつひにJAXAに認定されぬ  
ふうりんの音を鳴らしつつ夕暮れの風はみづから秋に近づく  
みづうみを船と鉄路でゆく朝はどこまでも青い秋のさざなみ  
ハンモックにゆられて愛でる名月よ氣比の松原の波音ゆれる  
秋茄子をゆつくりもぎゆく母の背に赤とんぼとぶけふの新涼  
月の船ゆうらり漕ぎて父は来る胡瓜の糠漬そなへる夕べ

○日常を詩的に掬い取る力がある。感覚が瑞々しく、歌が美しい。今までの静かな世界観に力強さが加わって、さらに魅力が増した。

○独自の比喩の使い方、複雑な心のうちを素直、端的に表現する。命とは、私とは何かを常に問いかける姿勢が深い。

○若々しくみずみずしい感性が全開しているさまは、読んでいる者を幸福にしてくれる。

○季節をスケッチするように、抒情が詠われていて、情景が目には浮かぶ。

### 北祐二郎推薦

○五十代の男性で、感性が繊細で美的。和語を多用し、韻きがやわらかい。心情の直接的な吐露ではなく、その翳を詠む。ロマンチズムの傾向が色濃い。

○古語をうまくだり取り入れており、日常のさりげない一面を詠んだ歌にも、熟年男性の落ち着きや、そこはかとない悲哀が感じられる。

○歌の調べが美しく、詩に昇華する繊細な表現が魅力。日常の一面から、読者を遠くへと連れて行ってくれるようで、歌の

世界が深まった。

### 浅田みどり推薦

○心情を飾らずに表現していて、歯切れがいい。判断力、内省力とともに、すこやかな情感をもつ人のようだ。今回は悲しみを詠んだ作品が印象に残った。

○自らの人生を深く理解し、より良い人生を志そうとする姿勢がいさぎよい。その生き方が選んだ言葉には、内省の趣きがあつて、心打たれる。

○季節感豊かに、日々の暮らしを詠む。老いを歌っても、そこはかとないユーモアが滲み、救われる。

### 永田恵美推薦

○日常からふいに飛躍して異世界へ読者を連れてゆく。心の奥深くにあるロマンの香りがどの歌にも滲んでいて、さびしの中にさしこむ明るさが印象的。

○日常生活の中から歌のエッセンスを巧みにつかみ取り洒落た歌に仕上げるセンスを持っている。

○軽やかな詠み口が特徴であるが、作品から拝察される作者の背景は複雑である。様々な分野

### 工藤亜希子\*

窓ごしの風が明度を増してゆくかなたで戦車が列をなす春  
春の朝は昏き水路につながってこここんこんと睡気やまずも  
大空に若くりりしい投手いてひここうき雲は直球の跡  
暮れやすきバス停に着き足降ろすあたりには水気配漂う  
わが知らぬ身ごもるといふ小宇宙ひたりの匂みどりごを抱く  
機結び時をつないでいくように芭蕉布となる糸継がれゆく  
ほどかたれたためぬまに胸にしま音だけ聴いた火花の夜は  
あの寡黙だった人がというような五月の樹々のおしやべりな緑  
寝過ごしていい日の朝は重低音のきみの駒をおごそかに聴く  
みずうみの一番深い青を見て浮かびて目覚む君のとなり

### 北祐二郎

開戦日の風に吹かれてレノン聴くわだつみも空もはろばると青  
やはらかきピアノソナタにまどろめり春まだ浅き夕光の部屋  
連にひかりの調べを聴くごとしみづうみに銀の秋風吹けば  
秋風に揺るはずなきわが影が池の水面に揺らぎてゐたり  
焦るほど浮かばぬ言葉足早に出口を探す風の公園  
失せものは心の中か冬ざれの青きベンチの小さき陽だまり

### 浅田みどり\*

コロナ禍の新年会はオンライン鴨居の部屋干し慌てて片す  
覚めてなお悲しみだけが残る夢ゆめの具体の記憶なければど  
わが後姿見えざるに似て自らを知ること難しわが歌もまた  
握りたる拳をひらく山椒の芽待ってましたと酢飯に散らす  
年玉はネットバンクに振込みて年賀の挨拶スカイプでする  
春キャベツぱりりと剝けば玉が散るいつかの雨の雫にあらん

### 永田 恵美

コンビニの午後のパン棚は空つぽでジャンバルジャンにもなれず帰る

からの借景も上手く、聡明さが魅力。

### 印出美由紀推薦

○対象をみつめる先に、哲学的な思索がある。はるかな時空の広がりのなかに人間の営みを見ようとする世界観が独自で、歌に奥行きを与えている。

○題材の幅が広い。客観的に対象を捉える姿勢が知的な世界を構成しているが、同時に詩的な言葉が選択されることによつて歌に深みが生まれている。

○わが身の変化を感知する鋭敏なセンサーを持つ。われ以外の眼でわれを捉える力がある。自然の深部を見つめ、そこに気づきを埋め込む。

### 荒川ゆみ子推薦

○日常詠の中に、作者固有の感受があつて、非日常までの距離が近い。どんな素材も自らの発想を基として、発想自体がユニークである。

○柔軟でユニークなもの見方のある作者。すつきりとした文体の中に小さな謎を発見してゆく。前向きでさわやかな用語ながら、ちらりと生きたさびしさ

を見せる。

### 一ノ宮陽子推薦

○ご主人を亡くされたのだから。悲しみをこらえているような歌群に胸を打たれる。

○日常の様々な素材を詠むことで、歌はこんなに多彩になるのかと思わせる。自分自身や亡き夫を詠んだ歌からは、素直な感情が伝わってくる。

### 中村 京推薦

○老いを自覚しつつも、内に籠もらず積極的に外部と交わることを楽しむ歌が多い。高齢化の進む歌の世界では、良き手本として勇気づけられる歌である。

### 石田信夫推薦

○衰えた老母を看取る苦勞の多い生活の中で、苦に溺れず苦を歌に昇華してゆく詠みぶりに感動を受けた。

### 高橋みどり推薦

○教員としての視点、母としての視点を大切にして詠んでいる。また社会の歪みに対しては、鋭い視点をもちつつ軽やかに詠む批判精神は魅力がある。

ジャイアンものび太もゐない公園で昔と同じ夕焼けを見る  
童ほど小さき人がをりさうで気をつけ気をつけ歩く春の野  
絹糸を草葉で染めた糸束のこれから何かになりゆく豊かさ

### 印出美由紀

月蝕のちなる月は夜空とふ胎にあるごとふくらみてゆく  
しんと樹を昇りゆく水ははじまりのみづ蟬たちが吸ふ  
半年を母国の悪に触れつづけ友はたたずむコヘレトのごと  
お調べの小鼓ポポと聞こえてきて能の舞台は地の果てとなる

### 荒川ゆみ子

崖に立つ人のやうなり 取れさうな一番うへのコート  
のボタン 地向けてワンタツチ傘開くとき何かを撃つてしまつた気がする  
よくずれる玄関マットを直すのはなんとといふ名の家事なのだらう

### 一ノ宮陽子

語りても語りつくせぬ夫のことひとり目葉さす秋の夜  
西側の小さき窓に茜さしかなしき夜が来るかもしれぬ  
恋はもうしないであらう春逝けば春はかなしとおもふ夕べよ

### 中村 京

差し並ぶフィンランドの展示品、神秘的な白夜に生れたのだらう  
「もう」と言ひ「まだ」だとも言ふ七十二その場その場で気随につかふ

### 石田 信夫\*

弁当をレンジにかけて「孤食」というひえた言葉で温める夕餉  
母寝かせ今日も酒を呑むこれでいいこれでいいのだこれでいいのか

### 高橋みどり\*

マスクした顔しか知らぬ生徒らがマスクのまま旅だつてゆく  
コロナだけが戦う相手のはずだった二千二十二年の流血